

2015 年度活動報告 総合政策学部：日本語Ⅰ・Ⅱ

性川 波都季（関西学院大学総合政策学部）

阿部 美恵子（関西学院大学日本語教育センター）

1. 授業の目的

学部正規留学生 1 回生対象の日本語クラス。1 週間に 2 コマ実施し、それぞれ【読む・書く】【話す・聞く】の技能を扱う。大学におけるアカデミックな活動において、日本人学生と同程度にこなしていける日本語能力・コミュニケーション能力・論理的思考力の習得をめざしている。

2. 授業内容

【読む・書く】

日本語Ⅰでは、橘木（2010）¹をグループごとに要約・発表し、やや学術的な形式で書かれた文章の理解を協働で進めた。同時に自作教材を用いて書きことばのルールについて確認し、学期末には自らの意見も含めた感想文執筆を課した。

日本語Ⅱでは、教育問題に関するレポートを執筆した。構成や図表の提示、引用の方法なども学びつつ、互いのレポートの不明点などを指摘し合う議論を繰り返し行った。また新たな試みとして、他クラスの学生からも、提出前のレポートについて意見をもらう授業回を設けた。

【話す・聞く】

日本語Ⅰでは、①人物紹介発表（朝日新聞の「ひと」欄についての発表）、②外来語発表（陣内他（2010）²の前半部分を使用）、③キーワード発表（現代日本文化を表すキーワードについての調査・発表）の 3 つの活動を行った。

日本語Ⅱでは、①私の視点発表（朝日新聞の「私の視点」欄についての話し合い、発表）、②外来語の独自学習（陣内他（2010）の後半部分を使用）を行った。

3. 成果と課題

【読む・書く】

日本語Ⅰは、昨年度から、学期初めに、自分が受けてきた教育課程を振り返るという時間を設けた。教科書の内容を自らの問題と関連付け読んでほしいと考えたため

¹ 橘木俊詔（2010）『日本の教育格差』岩波新書

² 陣内正敬・森本郁代・阿部美恵子・笹井香・竹口智之（2010）『時事外来語で日本理解』関西学院大学出版会

ある。授業内の議論や学期終わりの感想文では、自分の出身国の教育制度や経験と比較し自らの見解を示しており、当初の目標はある程度達成された。

日本語Ⅱは、今年はじめて最終レポート直前の原稿を、他のクラスの学生にも読んでもらうという試みを行った。第三者が読むと、特に論理的一貫性の面で不明瞭な部分が鋭く指摘され、最終レポートの充実に役立った。

【話す・聞く】

日本語Ⅰでは、今年初めてキーワード発表を行った。グループで協力して日本人学生対象のアンケートを作成・実施し、結果をまとめて発表するもので、グループで協力することに慣れること、困ったときに声かけられる日本人の友達作りのきっかけとすることを意図した活動である。グループでの意見交換が活発になされるようになり、日本語Ⅱの話し合いや発表後の質疑応答でも積極的に意見を言う学生が増えた。

日本語Ⅱでは、私の視点発表の発表前準備に、LTD 話し合い学習法³を取り入れ、発表前に教員がチェックをしなかった。学生からは、話し合いや予習に用いた読解シートで内容理解や発表のレジュメ作成が容易になった、自力で準備したことに対するフィードバックを発表後にもらうため、もっと印象に残ったという声が聞かれた。

4. 今後に向けて

【読む・書く】

日本語Ⅰでは単なる内容の理解を越えた批評的読みをめざしたが、要約・発表・理解の過程では、内容の正確な理解に追われるという実情もある。また日本語Ⅱでは上記の試みを学期末に取り入れたものの、その段階で論理的一貫性についての指摘を受けても修正する時間が足りないという問題が残った。

来年度に向けての大きな変更点として、1 学期目からレポート執筆に取り組むことを考えている。入学直後は日本人学生も含めレポートという課題にもっとも戸惑う時期であり、実際に執筆してみるという経験が重要であろう。

【話す・聞く】

日本語Ⅰでは、人物紹介発表、外来語発表、キーワード発表の3つの活動があり、各活動が時間に追われてしまった。特に外来語発表に時間をとられることが多かった。来年度は1 クラスあたりの学生数も増加するため、その他の活動にしっかり時間がとれるよう外来語発表の形式を変えることを検討している。

日本語Ⅱでは LTD 話し合い学習法の導入は効果的であったが、1 回目の話し合いの際にやや混乱も見られた。合同クラスで学習方法の説明を行う等することで、1 回目からスムーズに話し合いが進められるようにしたい。

³ 安永悟・須藤文（2014）『LTD 話し合い学習法』ナカニシヤ出版